

8 外国語・英語（専門）

○ 外国語

(1) 改訂のねらい

外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっている。そこで、外国語教育を通じて育成を目指す資質・能力全体を貫く軸として、特に、他者とのコミュニケーションの基盤を形成する観点を重視しつつ、他の側面（創造的思考、感性・情緒等）からも育成を目指す資質・能力が明確となるよう整理された。あわせて、各学校段階の学びを接続させるとともに、「外国語で何ができるようになるか」を明確にするという観点から、中学校での学びとの接続を意識しながら主として次のように改善が図られた。

- ア 統合的な言語活動を通して「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと[やり取り]」、「話すこと[発表]」、「書くこと」の五つの領域を総合的に扱うことを一層重視する科目の新設。
- イ 「話すこと[やり取り]」、「話すこと[発表]」及び「書くこと」を中心とした発信能力の強化を図るため、特にスピーチ、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッション、まとまりのある文章を書くことなどを扱う選択科目の新設。
- ウ 「話すこと[やり取り]」、「話すこと[発表]」及び「書くこと」の指導に当たっては、目的や場面、状況などに応じたやり取りや発表、文章などの具体例を示した上で、生徒がそれらを参考にしながら自分で表現できるよう留意することを明記。
- エ 文法事項の指導については、文法はコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ過度に文法的な正しさのみを強調したり、用語や用法の区別などの指導が中心となったりしないよう配慮し、使用する場面や伝えようとする内容と関連付けて整理するなど、実際のコミュニケーションにおいて活用できるようにするための効果的な指導を工夫すること、また教材についても文法事項などを中心とした構成とならないよう、言語活動を通して育成すべき資質・能力を明確に示すことを明記。

(2) 科目編成

ア 科目構成と標準単位数は次のとおりである。

科目	(標準単位数)	科目	(標準単位数)
英語コミュニケーションⅠ	(3)	論理・表現Ⅰ	(2)
英語コミュニケーションⅡ	(4)	論理・表現Ⅱ	(2)
英語コミュニケーションⅢ	(4)	論理・表現Ⅲ	(2)

- イ 全ての生徒が履修すべき科目は、「英語コミュニケーションⅠ」である。
- ウ 選択科目は「英語コミュニケーションⅡ・Ⅲ」、「論理・表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」である。
- エ 「英語コミュニケーションⅡ」は「英語コミュニケーションⅠ」を履修した後に、「英語コミュニケーションⅢ」は「英語コミュニケーションⅡ」を履修した後に、「論理・表現Ⅱ」は「論理・表現Ⅰ」を履修した後に、「論理・表現Ⅲ」は「論理・表現Ⅱ」を履修した後に履修させることを原則とする。

(3) 科目の内容

ア 「英語コミュニケーションⅠ」

全ての生徒に履修させる科目であり、中学校における「英語」の学習内容との接続を考慮しながら、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと[やり取り]」、「話すこと[発表]」、「書くこと」の五つの領域別の言語活動及び複数の領域を結び付けた統合的な言語活動を通して、五

つの領域を総合的に育成する。

イ 「英語コミュニケーションⅡ」

「英語コミュニケーションⅠ」の学習内容を踏まえ、五つの領域の総合的な指導を発展的に行う。

ウ 「英語コミュニケーションⅢ」

「英語コミュニケーションⅡ」の学習内容を踏まえ、五つの領域の総合的な指導を、生涯にわたる自律的な学習につながるよう発展的に行う。

エ 「論理・表現Ⅰ」

「話すこと[やり取り]」、「話すこと[発表]」、「書くこと」の三つの領域別の言語活動及び複数の領域を結び付けた統合的な言語活動を通して、発信能力の育成を強化する指導を行う。

オ 「論理・表現Ⅱ」

「論理・表現Ⅰ」の学習内容を踏まえ、発信能力の育成を強化するための指導を発展的に行う。

カ 「論理・表現Ⅲ」

「論理・表現Ⅰ」及び「論理・表現Ⅱ」の学習内容を踏まえ、発信能力の育成を強化するための指導を発展的に行う。

(4) Q & A

Q 1 外国語科における改訂のポイントは何か。

従前の「コミュニケーション英語基礎」、「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」、「英語表現Ⅰ・Ⅱ」、「英語会話」を廃止し、7科目から6科目による構成に変更した。このうち、全ての生徒が履修すべき科目は「英語コミュニケーションⅠ」である。

これまでも生徒のコミュニケーション能力向上のための指導の充実が図られてきたところではあるが、高等学校の授業においては、依然として外国語によるコミュニケーション能力の育成を意識した取組に課題がある。特に、「話すこと」及び「書くこと」などの言語活動が適切に行われていないこと、また「やり取り」や「即興性」を意識した言語活動が十分ではないこと、読んだことについて意見を述べ合うなど複数の領域を結び付けた言語活動が適切に行われていないことなどが指摘されている。語彙や文法等の個別の知識がどれだけ身に付いたかに主眼が置かれるのではなく、「外国語を使って何ができるようになるか」という観点から、学びの過程全体を通して、知識・技能が実際のコミュニケーションにおいて活用され、繰り返し思考・判断・表現することで獲得され、学習内容の理解が深まるように指導の改善・充実を図ることにポイントが置かれている。

Q 2 新学習指導要領には、現行学習指導要領の「英語会話」に相当する科目はあるか。

「英語会話」に相当する科目はない。「英語会話」の内容は、新設科目である「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ」及び「論理・表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の内容に整理統合されている。

Q 3 主として英会話を扱う科目を学校で独自に設定する際に、留意すべき点は何か。

外国語科の目標を踏まえ、情報や考え、気持ちなどを即興で、あるいは理由や根拠とともに話して伝える活動、話した内容を整理して文章で書いたり、それについて質疑応答をしたり、

意見や感想を伝え合う活動などを通して、コミュニケーションを図る資質・能力を総合的に育成するよう留意しなければならない。

Q 4 目標にある「目的や場面、状況など」とは具体的にどのようなことか。

コミュニケーションを行うことによって達成しようとする際の目的や、話し手や聞き手を含む発話の場面、コミュニケーションを行う相手との関係性やコミュニケーションを行う際の環境などを指す。母語と同様に、外国語においても、読んだ情報を他の情報と比べるなど、目的に応じて情報を精査したり、相手に応じた話の内容、構成、表現などを選択するとともに、伝える内容を自らが的確に理解し、自分の言葉として表現できるようにする必要がある。このように、「目的や場面、状況など」に応じた言語の運用を考えることで、「思考力、判断力、表現力等」が育成される。

Q 5 各科目の領域別の目標及び言語活動における「支援」とは具体的に何か。

言語活動において、教師は、生徒が英語を理解したり英語で発信したりする状況を把握しながら、学習上の様々な配慮を行うことが必要である。例えば、話す速度を落としたり、一度にたくさんの情報を伝えるのではなく分けて伝えたりする（「聞くこと」）、理解が難しい語彙や表現が含まれている場合は簡単なものを書き換える（「読むこと」）、対話の例を示すため教師が実際のやり取りを見せる（「話すこと[やり取り]」）、発表の事前準備として、グループで話し合わせたり、アウトラインを書かせたりする（「話すこと[発表]」）、書く活動を行うにあたって有用な語彙や表現を示す（「書くこと」）など様々な配慮が考えられる。このように、実際のコミュニケーションの過程で考えられる様々な配慮が、「支援」と総称されている。こうした指導上の配慮は、生徒の学習過程のあらゆる段階で与えることが可能であり、生徒の実態や学習過程における必要性に応じて柔軟に工夫することが求められる。

Q 6 言語活動を行う上での留意事項は何か。

言語活動の指導に当たっては、活動の目的に応じて、ペア・ワークやグループ・ワークなど様々な学習形態を活用していくことが重要である。教室には様々な個性や特性のある生徒がいるため、それらを把握した上で、指導に効果的と考えられる学習形態を柔軟に選択していくことが求められている。

個々の生徒の特性によって、見えにくさ、聞こえにくさや発音のしにくさなど、学習活動を行う場合に生じる困難さが異なることに留意し、それぞれに応じた指導内容や指導方法を工夫しなければならない。例えば、「他者とのコミュニケーションに課題がある生徒」については、その生徒が日頃から関わることのできる生徒をペアの相手やグループのメンバーに意図的に配置することなどが考えられる。

Q 7 「指導計画作成上の配慮事項」に、「授業は英語で行うことを基本とする。」とあるが、これまでと変更点はあるのか。また、日本語は使用できないのか。

高等学校については従前から明記されていたが、今回の改訂では、小学校の外国語活動における豊富な英語使用の実態を中学校での学びに生かすための環境づくりが重要であることから中学校においても同様の規定が盛り込まれた。小学校及び中学校において豊富な英語の使用により培われた実際のコミュニケーションの場面で使用する英語への学習意欲を高等学校での学

びに生かすためにも、引き続き「授業は英語で行うことを基本とする」ことが重要となる。

「授業は英語で行うことを基本とする」とは、生徒が日常生活において英語に触れる機会が非常に限られていることを踏まえ、教師が授業中に積極的に英語を使用することで、生徒の豊富な英語使用を促すことと併せて、英語による言語活動を行うことを授業の中心とすることを示している。挨拶や指示だけでなく、説明や発問、課題の提示などを生徒が分かる英語で話し掛けることから始め、徐々に新出の語彙なども入れていくような段階を踏みながら、授業全体が実際のコミュニケーションの場となるようにすることが必要であり、教師がただ英語を使って授業を行えばよいということではない。特に、英語でコミュニケーションを図ることが苦手な生徒に対しては、発話の速度や明瞭さを調整する、使う語句や文などをより平易なものに言い換える、繰り返したり具体の例を提示したりする、などの工夫、配慮をした上で、生徒が英語でのコミュニケーションに慣れるように、日頃から自分の考えや気持ちを表現する活動を、段階を踏みながら繰り返し行っていくことが大切である。

「授業は英語で行うことを基本とする」のポイントは「英語に触れる機会」と「実際のコミュニケーションの場面」を創出することであり、そうした趣旨の授業展開であれば、必要に応じて補助的に日本語を用いることも考えられる。しかしながら、生徒の苦手意識を減らそうとする余り、教師が英語による自分の発話の直後に日本語の意味を付け加えるなど安易に日本語を使用することは、逆に、生徒から真の意味での「英語に触れる機会」や「実際のコミュニケーションの場面」を奪い、いつまでも英語の苦手意識から抜け出すことができず、自律的な学習者としての成長を阻害する原因を作る可能性があることに十分留意しなければならない。

Q 8 語彙や文構造、文法の指導における留意事項は何か。

語彙には、生徒の発達の段階に応じて、聞いたり読んだりすることを通して意味を理解できるように指導すべき語彙（受容語彙）と、話したり書いたりして表現できるように指導すべき語彙（発信語彙）とがあり、全ての語彙を生徒が発信できるようにすることが求められているわけではない。特に高等学校においては、中学校までに学習した2,500語程度をできるだけ発信語彙として用いる機会を豊富に提供することが重要である。

また、文構造及び文法事項については、文法的な正確さだけを求めたり、コミュニケーションの文脈から切り離して、個々の文法事項をどれだけ理解しているかといった観点で評価したりすることは、生徒が文法事項を実際のコミュニケーションの場面において、誤りを恐れずに活用しようとする態度を萎縮させてしまいかねないことへの配慮が必要である。

実際の指導においては、まずコミュニケーションを行う目的や場面、状況などを設定した上で、それぞれの言語活動に必要な文法事項を提示して、その文法事項の活用の必然性に生徒が気付くような指導を行うとともに、学んだ文法事項を意味ある文脈の中で使い、使っては学ぶといった、理解や練習と実際の使用のサイクルを繰り返す中で、コミュニケーションを図る資質・能力を育成していくことが求められている。

Q 9 辞書指導において配慮すべきことは何か。

高等学校においては、中学校で身に付けた辞書の使い方を基礎として、外国語を理解したり外国語で表現したりする上で効果的な辞書の使い方を指導することは、生徒の自律的な学習態度やコミュニケーションを図る積極的な態度を育成することにつながる。

その際、未知語に出会うたびに辞書を使って調べるといった態度ではなく、例えば、どの語が文脈から推測可能であり、どの語の意味を辞書を使って正確に知ることが重要であるかを判断する能力を育成することも大切である。読む活動だけでなく、話したり書いたりする活動に

においても、必要に応じて辞書を活用する能力を身に付けさせなければならない。

Q10 ICT機器はどのように活用すればよいか。

視聴覚教材やその他の教育機器を有効活用することは、外国語の指導の中で欠かせない要素であり、例として次のような活動が考えられる。

- 1 写真や映像などを見せることで理解を促進し、現実感や臨場感を与える活動
- 2 インターネット等で学校外へと広がる、現実との結びつきの濃い発展学習を行う活動
- 3 教師やALT等の使う英語だけではなく、様々な英語に触れる活動
- 4 資料や情報を入力したり、電子メール等によって情報を英語で発信する活動

また、生徒がコンピュータを活用して英文を書くことにより、添削などの指導面において効率化が図られるなど、ICTを活用することで、言語活動をより充実させることが期待できる。今後生徒が社会生活を送る上で、コンピュータ上でやり取りをする機会が更に増えることなどを考慮し、「ウェブ上で情報検索をする活動」「キーボードを使って英文を入力する活動」など、教育機器の効果的な活用を工夫していくことが重要である。

Q11 外国語科の目標は、道德教育とどのように関係しているか。

道德教育は、生徒が人間としての在り方生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として、他者と共によりよく生きるための基盤となる道德性を養うことを目標としている。外国語科の目標には、「外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的、自律的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う」と示されている。「外国語の背景にある文化に対する理解を深め」ことは、世界の中の日本人としての自覚をもち、国際的視野に立って、世界の平和と人類の幸福に貢献することにつながるものである。また、「聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮」することは、外国語の学習を通して、他者を配慮し受け入れる寛容の精神や平和・国際貢献などの精神を獲得し、多面的思考ができるような人材を育てることにつながるものである。

○ 英語（専門）

(1) 改訂のねらい

専門教育を主とする学科の特色が一層生かされ、一人一人の生徒の進路に応じた多様な可能性を伸ばすために、より高度で専門的な学習ができる科目構成に見直され、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと[やり取り]」、「話すこと[発表]」、「書くこと」の五つの領域を総合的に扱うことを一層重視する科目と、高度な発表、討論・議論、交渉等を通して「話すこと」、「書くこと」によるコミュニケーションの力を高める科目を設定した。

(2) 科目編成

ア 科目構成と標準単位数は次のとおりである。

科目	(標準単位数)	科目	(標準単位数)
総合英語Ⅰ	(3～12)	ディベート・ディスカッションⅠ	(2～6)
総合英語Ⅱ	(4～6)	ディベート・ディスカッションⅡ	(2～6)
総合英語Ⅲ	(4～8)	エッセイライティングⅠ	(2～6)
		エッセイライティングⅡ	(2～6)

イ 英語に関する学科の原則履修科目は「総合英語Ⅰ」と「ディベート・ディスカッションⅠ」である。

(3) 科目の内容

ア 「総合英語Ⅰ」

- (ア) 英語科において、全ての生徒に必ず履修させる科目の一つであり、五つの領域別の言語活動及び複数の領域を結び付けた統合的な言語活動を通して、コミュニケーション能力の総合的な育成を図る。
- (イ) 聞いたり読んだりしたことの概要や要点を目的に応じて捉えたり、多様な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理的に伝えることなどができるようする。

イ 「総合英語Ⅱ」

- (ア) 「総合英語Ⅰ」の学習を踏まえ、英語によるコミュニケーションを図る資質・能力を一層伸ばすために、五つの領域の総合的な指導を発展的に行う。
- (イ) 聞いたり読んだりしたことの概要や要点、詳細を目的に応じて捉えたり、多様な語句や文を目的や場面、状況などに応じて適切に使って、情報や考え、気持ちなどを論理的に詳しく話したり書いたりして伝えることなどができるようにする。

ウ 「総合英語Ⅲ」

- (ア) 「総合英語Ⅱ」の学習を踏まえ、英語によるコミュニケーションを図る資質・能力を一層伸ばすために、五つの領域の総合的な指導を、生涯にわたる自律的な学習につながるよう発展的に行う。
- (イ) 多様な語句や文を目的や場面、状況などに応じて効果的に用いて、情報や考え、課題の解決策などを幅広い視点から論理的に詳しく話したり書いたりして伝えることなどができるようにする。

エ 「ディベート・ディスカッションⅠ」

- (ア) 英語科において、全ての生徒に必ず履修させる科目の一つであり、「話すこと[やり取り]」を中心とした発信能力及び論理的な思考力や表現力の育成を強化する指導を行う。
- (イ) 資料を的確に活用し、多様な語句や文を用いて、賛成又は反対の立場をとった上で論理的に一貫性のある議論を展開することや、情報や考え、気持ちなどを論理の構成や展開を工夫して詳しく話して伝え合うことができるようにする。

オ 「ディベート・ディスカッションⅡ」

- (ア) 「ディベート・ディスカッションⅠ」の学習を踏まえ、「話すこと」を中心とした発信能力及び論理的な思考力や表現力の育成を強化する指導を発展的に行う。
- (イ) 複数の資料を的確に活用し、多様な語句や文を目的や場面、状況などに応じて効果的に用いて、賛成又は反対の立場をとった上で、論理的に一貫性のある議論をすることや、他者の意見などに配慮しながら自分自身の意見や主張などを詳しく話して伝え合うことができるようにする。

カ 「エッセイライティングⅠ」

- (ア) 「書くこと」の言語活動及び複数の領域を結び付けた統合的な言語活動を通して、発信能力及び論理的な思考力や表現力の育成を強化する指導を行う。
- (イ) 資料を的確に活用し、多様な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちや、意見や主張などを、論理の構成や展開を工夫して複数の段落から成る文章で詳しく書いて伝えることができるようにする。

キ 「エッセイライティングⅡ」

- (ア) 「エッセイライティングⅠ」の学習を踏まえ、「書くこと」を中心とした、発信能

力及び論理的な思考力や表現力の育成を強化する指導を発展的に行う。

- (イ) 複数の資料を的確に活用し、多様な語句や文を目的や場面、状況などに応じて効果的に用いて、意見や主張などについて読み手を引き付けたり説得したりできるよう、幅広い視点から論理の構成や展開を工夫して複数の段落から成る文章で詳しく書いて伝えることができるようにする。

(4) Q & A

Q 1 教育課程編成上の変更点は何か。

従前の「総合英語」「英語理解」「英語表現」「異文化理解」「時事英語」を廃止し、5科目から7科目（「総合英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」、「ディベート・ディスカッションⅠ・Ⅱ」、「エッセイライティングⅠ・Ⅱ」）による構成に変更した。このうち、「総合英語Ⅰ」と「ディベート・ディスカッションⅠ」は原則として英語に関する学科の全ての生徒に履修させることとした。

「ディベート・ディスカッションⅠ・Ⅱ」では、特に「話すこと[やり取り]」の力及び論理的な思考力や表現力の育成を強化する指導を行い、ディベートやディスカッションだけでなく、スピーチやプレゼンテーションにおいても、専門科目としてふさわしい内容を取り扱うことが求められる。

「エッセイライティングⅠ・Ⅱ」では、特に複数の段落から成るエッセイなどを「書くこと」を中心とした、発信能力及び論理的な思考力や表現力の育成を強化する指導を行い、専門科目としてふさわしい内容を取り扱うことが求められる。

Q 2 主として異文化や時事問題を扱う科目を学校で独自に設定する際に、留意すべき点は何か。

専門教育である英語科の目標を踏まえ、4技能5領域それぞれの言語活動及びそれらを結び付けた統合的な言語活動が行われる科目となるよう留意する必要がある。

Q 3 「総合英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の授業で「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ」の教科書を使用することは可能か。

可能である。しかしながら、「総合英語Ⅰ・Ⅱ」における学習内容は、基本的には「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ」に準ずるものの、より自律的な学習を目指し、「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ」より少ない支援を活用して、専門科目としてふさわしい内容を取り扱わなければならない。また、「総合英語Ⅲ」は「英語コミュニケーションⅢ」を発展させた内容となっている。「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ」の教科書の使用は、専門教科に属する各科目の目標が達成できる場合に限られる。